

井原市立平櫛田中美術館

彫刻家・平櫛田中（1872-1979）は、幅広い作風で情感豊かな作品を創造した。井原に生まれ、10歳で広島県福山近郊の家庭の養子となり、1897年に上京したが、東京では成功を掴むまで何年も苦労を重ねた。岡倉天心（1863-1913）をはじめとする有力な美術指導者たちからの称賛が、彼の作品が注目されるきっかけとなった。田中は天心に強い憧れを抱いており、天心の死後数十年経っても、田中は天心をモデルにした傑作を数多く制作した。1944年、田中は帝室技芸員に任命され、1970年には、井原市によって田中の業績を展示するためにこの美術館が建設された。美術館は井原駅からそれほど離れていない町の中心部にあり、田中が訪れた際には、建物の前にあるクスノキを植えたという。

美術館の収蔵品には、田中の芸術テーマが幅広く展示されている。鬼が人間を吐き出すという恐ろしい作品『転生』のように仏教観に基づいて人物を描いた作品もあれば、より身近なテーマにフォーカスした作品もある。彼の作品『姉娘』は、貧しくて家庭でラジオを所有することできないことから、田中の娘が両手を耳に当ててひざまずき、近所のラジオに耳を傾けているところを表している。

田中の代表作のひとつに、歌舞伎俳優の六代目尾上菊五郎（1885-1949）の堂々たる

『鏡獅子』像がある。『鏡獅子』は普段は東京の国立劇場のロビーに置かれているが、鏡獅子像の試作品や未完成作はここに展示されている。